

江戸のコレラ大流行

「安政午秋 頃痢流行記」の翻刻版



国立公文書館 蔵

一杉 勝

茶毘室混雑の図



煙を上げる小塚原の焼場。処理能力を超えて入口に積上げられる棺。そこへ次から次からあらたな棺が運び込まれる。棺の形は様々、酒樽も利用されている。



はじめに

令和二年、本来ならオリンピックで盛り上がりつつある筈の日本ですが、中国に端を発した新型コロナウイルスの大流行で、オリンピックは延期、緊急事態宣言の発令で日本国中が自粛生活を強いられています。

江戸時代にも様々な感染症が江戸の町を襲いました。インフルエンザ（当時は風邪との区別がついていなかった）をはじめとして天然痘、麻疹、結核など枚挙にいとまがありません。

江戸市民の衛生知識が低かったこと、有効な予防法、治療法がなかったため、一度感染症が流行すると、その被害は甚大で、江戸での死者が何万人にも達する「災害」になりました。

このうち、コレラは鎖国政策のため、世界の流行が日本に波及する事を免れていましたが、安政年間、五カ国条約が締結され、外国人が日本に来るようになると、「防波堤」がなくなり、安政四年（一八五八）にコレラが長崎に上陸、たちまち全国を席卷する大流行となりました。

このコレラ大流行の惨状をまとめて刊行されたのが「安政午秋 頃痢流行記」です。著者は金屯道人こと仮名垣魯文とされています。多数刊行されたらしく、国立公文書館や早稲田大学図書館、国会図書館、京都大学、大阪中之島図書館、長崎大学などに多数現存、所蔵されています。

この史料によれば、安政五年（一八五九）の八月が感染のピークとなり、この月だけで江戸市中の死者が一万二千五百人にのぼったが、九月中旬にはたと感染が止ったとあります。

当時の江戸の人口などの数字には間違と思われる箇所もありますが、文章はなまなましく江戸の流行の様様を伝えています。

昨今の新型コロナウイルス大流行で、過去の感染症流行について改めて調べる動きがあり、この「頃痢流行期」も注目されているようです。この史料の翻刻本を探して見ましたが、管見の限り見当たらないので、浅学ながら翻刻を試みました。

原文を編集し、解読文と対照する形にしましたので、医学史を研究する方以外に、古文書の解読を学ぶ方などの参考となれば幸いです。

令和二年（二〇二〇年）八月

凡例

- ・ 解読文は原文をそのまま活字に置き換え、漢文の読み下し文にある返り点（し、や、一、二点など）は省略した。
- ・ 漢字は原則として常用漢字としているが、原文のくずし字が旧字をくづしたものであることを理解してもらうために、解読文にも適宜旧字を使用している。
- ・ 変体仮名は原則としてひらがなにした。本文は旧仮名づかいのままとしたが、ふりがなについては現代仮名づかいに直している。
- ・ 助詞の「者」「而」「茂」「与」「は」はそれぞれ「は、て、も、と」と表記した。しかし、目的格助詞の「江（え）」「に」「は」「は」は違和感があるもので、現代語の「の」「へ」「と」と表記した。
- ・ 「よ」は「よひ」「よじ」「よ」はそのまま表記している。
- ・ 原文に句読点がないことが多いが、読みやすく、意味をわかるように解読文には多めに句読点をいれている。

この翻刻本の原本は下記を参照してください。

[国立公文書館](#)

[早稲田大学図書館](#)

序文

転寝の遊目序

正享間記ては書の中に、正徳六年の夏、
熱症おほく世に流行て、大江戸のまちくに
病て死する、個月のうちに八萬に余りぬるにぞ。
棺を工らとまなく、酒の空樽を贖ひて亡骸を
おさめ、寺院に野辺送るおき土の場も、埋るに
咫尺なければ、其宗体を論ぜず、火葬ならでは
請おさめず、このゆえに誰も渠も茶毘所に
おくるに棺の数かぎりもなく積重て、半月を過れ
ども焼こと能はず、到来の順を待ば、日数はるかに
経て、貧き者の亡骸はいかにもすすべなく、處の
長がはからひにも届かで、終に
公聴に訴へまうしに、最もかしこき泰命を蒙り
速に寺院におほせて、葬り難きは回向の後こ
拵むしろに包て船に乗せ、品川の沖こしてしめて
水葬になさせ給ひしとぞ記たり、されば此たびの

菰むしろに包て船に乗せ、品川の沖にこつめて

水葬になさせ給ひしとぞ記たり、されば此たひの

暴病にわかちまひに人のおほく損ずるさまも、その時の事に

似かはひたれば、いにしへを当時いたへらべ、今もむか

となる折がら、談柄はなごころともなしてんものをも、筆まめびとの

かひしるしたる老婆心を、むげに見捨てしもの

本意ほんいなく、一種ひとくの暗記あんきをもて序かじに換かへものならじ

安政やすせいつちのえ午うまの秋あきむく月つき

はじめの八日やっぴちに ふきいほりにあせ

紀きのおひかおひかつつ

白樗道人

註

- ・たくらべ…接頭語「た」+くらべ　くらべると同じ意
- ・かいしるす…書き記す　「かい」は「かき」の音便
- ・はじめの八日…初旬の八日、「つまり八日のこと
- ・白樗道人…この絵を描いた人か。　「樗」は梅の異体字

安筒劣痢流行記要略

紅花の用り教養界の衰へ後、甚ある物の無きと。此の
 あひひ自給ありたる中、小常あひひ後、むとがたがた、あはれ
 又さうする業ありて、生死に没て、是れ海のもの。あひひれ、流布の
 暴深病ありたり。元依の如き、更ふて、年々、思ひ後、今、安政
 五年、年六月、下旬、東海道、流布、初、近、國、一、圓、み、び、ろ、と、り、て。
 此病、小、花、さ、る、若、九、五、小、一、生、成、保、つ、不、稀、な、る、を、偏、地、い、ふ、本、來、か
 藤、が、毒、散、小、目、前、み、見、す、あ、る、土、地、と、い、ふ、大、江、江、の、上、旬、
 赤坂、小、不、作、り、甚、岸、高、辺、あ、り、多、く、あ、り、て、日、々、を、後、如、小
 相、移、り、八、月、上、旬、さ、う、中、旬、あ、り、て、い、病、倍、と、甚、ん、り、て、死、す、若
 大、江、一、所、小、五、余、人、小、さ、い、五、六、中、人、葬、後、の、棺、大、江、小、路、小、陸
 續、て、甚、松、と、葉、を、終、る、間、を、り、府、内、教、方、の、寺、院、の、何、れ、も
 門、前、小、角、を、は、し、焼、場、の、板、不、せ、れ、ま、で、積、ま、り、て、出、成、を、せ、り
 夕、小、人、を、焼、葬、坊、も、且、小、茶、畏、の、相、り、と、さ、り、柳、入、ら、ま、り
 石、塔、屋、も、今、の、る、小、自、己、が、名、と、五、掃、小、止、る、あ、り、一、々、小、言、も
 尽、き、ん、竹、織、の、澤、江、傳、の、史、も、披、閱、く、も、未、加、る、例、を、見

(一) 流行記概略

安簡勞痢流行記概略

紅花の風に散、黄葉の霜に移、盛なる物の衰ること、此世の
ならひ自然なり。さるが中に、常ならぬ風に誘われ、少きが老るに先立も
又定りたる業にして、生死は決て量べからず。しかはあれ、当時流布の
暴瀉病にて死する者、凡俗の心には更に天命とは思ひ設ず、今爾安政
五戊午年六月下旬、東海道筋より流行初、近国一円にひろがりて
此病に犯さるる者、九死に一生を保つは稀なり。遠く隔る地は去来不知
僕が輩、既に目前に見聞する土地をいはんに、大江戸は七月の下旬
赤坂辺に始り、靈岸島辺にも多くありて、日ならず諸処に
押移り、八月上旬より中旬に至りては病倍々盛んにして、死する者
大きは一町に百余人、小きは五六十人、葬禮の棺、大道小路に陸
続て、晝夜を棄ず、絶る間なく、御府内数方の寺院は何所も
門前に市をなし、焼場の棺、所せきまで積ならべて山をなせり。
夕に人を焼葬坊も、旦に茶毘の煙りと登り、誂へられし
石塔屋も、今の間に自己が名を五輪に止るなど、一々に言も
尽さず、博識の漢の倭の史とも披閲ても、未かゝる例を見

註

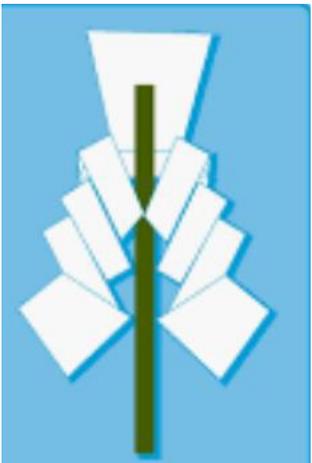
コレラの異名 簡勞痢、暴瀉病、頃痢、狐狼狸、虎列刺、虎狼痢など
多数ある。

出ださるる。医工の鑑定あり。病根名證と知りては、
 徒小歌と傳へ。もて括れて死と侍而るなりとも方後ほ。
 通々芳孝教の如き御侍方。和菜シボルトの経路あるを救急
 の要方と傳ふも。卒病即死用ふる可なり。後する可しと云ふは不
 土作病名と批復程と揮号して。あめ鏡と流言。姑怪愛化の
 所為あり。且水毒といひ魚毒といひ是が為る可なり。上下。あま
 清支玉門の流を汲て醫小喃。生息と喰ひ。あまも。日夜は
 福小札されん。戌慈の門左の。神の守札と張。八の指の本の。を
 約一。梳十字街の。彦守の。神樂と昇出。獅子歌と舞し。
 幣帛と振瀆。播し。新並家。おと。振洋める。あま。から。幸の
 疾。色。あ。べ。と。あ。う。死。門。也。不。松。行。を。終。る。五。七。五。三。纏。と。引
 巡。り。あ。ま。と。前。も。あ。ま。に。厄。拂。か。と。外。面。あ。ま。あ。り。その。林
 紙。園。會。と。幸。城。と。お。文。へ。と。お。地。せ。り。長。る。ん。未。曾。有。の。珍。り。り
 あり。あ。ま。あ。の。不。也。後。自。れ。バ。目。前。子。兄。顔。未。と。記。り。け。ん。
 神。仏。の。衣。履。雲。葉。の。効。験。と。然。し。と。あ。め。後。患。あ。り。ら
 あ。あ。ん。り。の。あ。ま。不。倫。か。と。幸。地。送。り。ま。う。ら。ん

出ず、名だゝる医工の鑑定にも、病根名證を知るよしなく、徒に頭を傾け、手を拱きて、死を待のみ、如何とも方便なし。適々芳香散の如き御伝方、阿蘭シーボルトの経験などと、救急の要法を得るとも、卒病即死、用るに間なく、服するに時を失ふ、故に土俗病名を狐狼狸と揮号して、あらぬ説を流言し、妖怪変化の所為なりとし、且水毒といひ、魚毒とす。是が為に市中の上下、水清き玉川の流を汲ず、盤に踊る生魚を喰ず、貴も賤も、日夜此病に犯されんことを愁ひ、門戸には諸神の守札を張、八つ指の木の葉を釣し提、十字街は鎮守の神輿を昇出し、獅子頭を舞つ、幣帛を振瀆繙かし、軒並家毎を祓浄めるあれば、かゝる年の疾過ぬべしと思ふより歟、門辺に松竹を飭り立、七五三繩を引巡らし、煎豆を蒔もあれば、厄拂ふとて外面に来るあり、その様祇園会と年越とを打交へたる心地せり。是なん未曾有の珍事にして、古今来の不思議なれば、目前に見し顛末を記るついで、神仏の応護靈薬の効験をも誌しとゞめ、後患なからめん事の用に備ふと、金屯道人まうす。

註

・幣帛：神道の祭祀で神に奉獻するもの。



・續繙・續翻（ヒンパン）：旗などの風に翻えるさま
 ・金屯道人：仮名垣魯文の号

仮名垣魯文（文政十二年～明治二十七年十一月）
 江戸末期から明治初頭にかけての戯作者、新聞記者。
 江戸京橋生まれ。本名は野崎文蔵、号は鈍亭、金屯道人、猫々道人など

於出島千八百五十八年七月十三日

當日本安政五年五月

此島三日中出島市中も一時は下痢且嘔吐が甚なり右患處
と既又昨日一時は二十人相煩及又西善利和蒸氣証之
ヒ一ふおくも右振之服病多人數内有右病系之者
流行のり此と其好以右も他國もも次日多分致り中

一 瀧國唐古もも此洲市海岸よりコレラアシアテイス之病名
流行仕右之府日之死失多人數内有由信之出島より
往來の歐邏巴人どもも此府を右下痢証の外患症仕實其
のコレラ病は多かれ成程防方仕儀は有るに右も推察
其實お交り大痛之害とお城の食料於熱は市中に右食
料を禁止仕保衛之手高示申す

才一 胡椒

才二 西丸

才三 李杏子 槐

右二品之玉極大事之下痢不可服物又此症の才三品を
於日本お用ひ振く未熟之菓物是も然無害に於此
一 歐邏巴之諸王其外國に於て右振之病氣殺むる儀
右病之増長防む其國民に右害を成し食料之儀

(二) オランダ医官の報告

於出島 千八百五十八年第七月十三日 当日本 安政五年五月

此両三日中、出島、市中とも一時に下痢、且追々吐かゝり申候、右患病の者、既に昨十二日、一時に三十人相煩、将又亜墨利加蒸気船ミシッヒーにおいても、右様の腹痛多人数御座候に付、右病原は究て

流行のものと奉存候、右は他国にても頃日多分発り申候。

一 隣國唐土にても、諸街市・海岸にはコレラアシアテイス病名

流行仕、右に付、日々死失多人数御座候由、依之出嶋に

罷在候欧羅巴人どもに付ては、右下痢殊の外変症仕、実眞

のコレラ病に不相成様、防方可仕儀に御座候、右の模様にては

眞実相発可申、右病の害と相成候食物顯然に御座候。右食

物類禁止仕、保養の手當示置申候

第一 胡瓜

第二 西瓜

第三 李子 杏子 桃

右二品は至極大事の下痢、不可服用に御座候、第三品は

於日本相用候様の未熟の菓物、是は顯然害に相成申候

一 欧羅巴の諸国、其外国々において、右様の病気発候節は

右病の増長防候為、其国民の右害に成候食料の儀

註

- ・ミシッヒー…ペリー艦隊の艦船ミシッピー号の事。中国を経由して長崎に入った際、乗員にコレラ患者がおり、これが長崎の町人に感染したといわれている。
- ・コレラアシアテイス…アジア型（古典型）のコレラと意味か。他にエルツール型があった。

告知せ、勿論売買禁候事必用の儀に御座候、依之和
蘭政府医師たる役目に御座候。且又日本人に付ては
左の通り養生法一統示方、強ては難申上儀に御座候
第一 胡瓜・西瓜・未熟の杏子・李等相用候儀禁候事
第二 人々裸にて夜気に触不申様心掛可申、夜分
決て衣類覆はず寝入申間敷候事
第三 日中暑氣にふれ、余り心労の仕事致間敷候事
第四 諸情弱の行、殊に酒呑過候儀、もつとも害に
相成候事

第五 若し下痢相覚候はゞ、直様療用の手当致し
猶予いたす間じく候事

右の通り申上候訳合にて、私共を襲候危敵たるコレラ病除
去候、御賢慮可被為在儀に御座候

和蘭海軍方第二医官

於日本窮理学官

ウエイエルボム ヘファン

メードルフワールド

この写は長崎出島、舶来の蘭人より奉行所へ書上候和解にして、全く日本
国のみ右病の流行するにあらざることをしらしめんがため、とくにしるして
世界のわずらひなる事顯然たり

註

ウエイエルボム ヘファン メードルフワールド

ヨハネス・レイディウス・カタリヌス・ポンペ・ファン・メールデルフオールト

(Johannes Liidius Catharinus Pompe van Meerdervoort)

ポンペという名で知られるオランダ海軍の二等軍医。ユトレヒト陸軍軍医学校で医学
を学び、末に来日、オランダ医学を伝えた。

基礎的な科目から医学を教え、長崎大学医学部附属病院のもとになる療養施設を作っ
た。文久二年まで滞在した。

(三) 御触書

御触書の写

此節流行の暴瀉病は、その療治かた種々ある趣に候得とも、その中、素人心得べき法を示す、予め是を防ぐには、都て身を冷事なく、腹に木綿を巻、大酒大食を慎み、其外こなれ難き食物を一切給申間敷候、若此症催し候はゞ、寢所に入て飲食を慎み、惣身を温め、左に記す芳香散といふ薬を用ゆべし、是のみにして治する者少からず。且又吐瀉甚敷惣身冷る程にいたりし者は、焼酎壱式合の中に、龍腦、又は樟腦壱式匁を入てあたゝめ、木綿のきれにひたし、腹并に手足へ静にすり込、芥子泥を心、下腹、手足へ小半時ぐらいつゞ張べし

芳香散

上品桂枝細末

益智同

乾姜同

各等分

右調合いたし、壱式はいつゞ、時々用ゆべし

芥子泥粉

餛飩粉うどん

各等分

右あつき酢にて堅くねり、木綿きれにのばし張候事、但し間に合はざる時は、あつき湯にて芥子泥ばかりねりてもよろし

又法

あつき茶に、其三分一焼酎を加し、砂糖を少し加へ用ゆべし、但座敷を閉、木綿きれに焼酎をつけ、頻りに惣身をこするべし

但し手足の先、并に腹冷る所を温鍊、又は温石を布に包み

註

- ・芳香散…漢方薬の一種。食欲不振（食欲減退）、胃部・腹部膨満感、消化不良、胃弱、過飲食、嘔吐
- ・心下…（漢方）みぞおちのこと
- ・桂枝…クスノキ科のケイ、またはそのほか同属植物の若枝。生薬のひとつ。
- ・益智…ヤクチという生姜科の植物の果実を材料とする生薬。
- ・乾姜…漢方薬に用いる生薬の一つ。生姜の根茎を湯通し又は蒸し、乾燥したもの。

湯とつゝいふ如くは持小旅程あるも又う
右之世當流初病愈々諸人疑義致し小付生症小拍つゞ
子垂用之害ある業法諸人小付の之世當者致お違ゆる

年八月

せんいふとゞふんをかゝる
子任小塚糸辺世致死人死にう救多之り故手与り兼殺日た
候之致し垂真字立中旨辺涉弟書由と殊之亦迷惑之候も
救申と物更志書け付もつゝの身業ふれれ若大腹痛致熱等
之病症お發つ中と醫方及方へ世當の心配致し小報之付由分候
埋木茂致し小死又い手与り致し方と有之部票効候つゝの
之は牙とふ玉指精之生筋へ中渡り
右之通寺社奉行の生筋へ中渡り町中と心得り以て其之
儀九年申候の中渡り

年八月

此世流初之病症あり死亡人多く市中一統忌縮之候り申ふ
祈禱と唱手拵之神樂或ハ抛子取木敷中町内持出初之
候早竟初書除儀と種き若大心持遠と有出拵之不業致る
處とも疑中候も祈禱未致し儀と指別多人救集り小拍子
あつゝの字目と違世當柄火之用心志勿漏致る相違儀申之候

湯をつかひたる如き心持に成程こするも又よし

右は此節流行病甚しく、諸人難義致し候に付、其症に拘はらず
早速用て害なき薬法、諸人心得のため、無急度相達候事

午八月

千住小塚原辺、此度死人おんぼう数多の事故、手廻り兼、数日その
俣に致し置、臭気立、下谷辺、浅草辺等は殊の外迷惑の趣にて
夜中は猶更甚敷、此体にては右臭氣にふれ候者共、疫癘・敗熱等
の病症相発可申と、医道方は此節より心配致し候趣に付、当分仮
埋等も致し候歟、又は手廻し致し方可有之哉、厚勘弁いたし、右杯
の次第に不至様精々其筋へ可申渡候
右の通寺社奉行より其筋へ申渡候間、町中其心得を以、埋葬の
儀取計候様可申渡候。

午八月

此節、流行の病症にて死亡人多く、市中一統恐縮の余り、中には
祈祷と唱、手遊の神輿、或は獅子頭等、夜中町内持歩行候哉の
趣、畢竟邪氣除候儀と、軽き者共心得違にて、右様の所業致間
敷とも難申、穩に祈祷等致し候儀は格別、多人数集り候様子
にては平日と違、此節柄、火の用心は勿論、都て物騒敷儀無之様

午九月

註

疫癘…悪性の流行病。疫病

兼の中後重ゆ舟お懐て在在俄右体公得遠有之る安全く
 風定返之儀をお望みぬ
 漸中強中第一公得遠之老
 有之ゆり尚人とも不及中、町役人尤返息後及沙汰小条を旨
 町中不渡指觸知りの也

千九月

(四) 風聞

○此昔深川富吉町道具屋何来者流病を死し
 貧窮あるゆりの葬具稠葉ゆ老へ棺桶を絶せ小日毎に十六
 宛此是是又未着有の功徳あり也

○尚八月中旬旬高漠沙何来者小建執丸つ死る小七
 近隣の老近ありし村友被験の祈りをもよきあぐと攻る丸
 小や執彼者の解と抜出舟の方へ逃去成在あ人へ返欠て是を
 捕へる時打殺してこれば長る老のそらひよく被執の死骸を
 焼捨く烟とあてて遠よ之尺に方法祠と建て靈をたよりまら
 尾崎大の林と崇るとぞ

○系播南傳る町を丁目捕屋何来の娘尚病小犯さて吐瀉を
 しく絶も入るき瓶相されば父母大いよふと死き周景近道の
 町醫横回何来とてく見せむるに彼医老容解とうち元操業
 ありとても命是未ありささども持業一帖と集らせんとて

兼て申渡置候に付、相愼可罷在儀、右体心得違有之間敷、全く
風聞迄の義と相聞へ候得共、御中陰中、萬一心得違の者
有之候はゞ、当人は不及申に、町役人共迄急度可及沙汰候条、其旨
町中不洩様可触知もの也。

午九月

(四) 風聞

○此節深川富吉町道具屋何某なる者、流行病にて死したる

貧窮なるやからの葬具調兼候者へ、棺桶を施すに、日毎四十五六
宛出す、是又未曾有の功德ならずや

○当八月中旬、佃島獵師何某なる者に、野狐取つきけるにぞ。

近隣の者駈あつまり、神官修験の祈りを乞ふて、さまざまと攻ける故
にや、狐、彼者の躰を拔出、外の方へ逃去を、在あふ人々追欠て、是を
捕へ、即時に打殺してければ、長たる者のはからひにて彼狐の亡骸を
焼捨て、烟となし、その辺に三尺四方の祠を建て、霊を祭り、すなはち
尾崎大明神と崇げまつり。

○京橋南伝馬町吉丁目桶屋何某の娘、当病に犯され、吐瀉甚

しく、絶も入べき形相なれば、父母大ひにおどろき周章、近辺の
町医横田何某を乞て見せしむるに、彼医者、容躰をうち見、脈察
して、とても存命覚束なし、されども捨薬一帖を参らせんとて

註

中陰…人が亡くなつてから次の新しい生へ向かうまでの四十九日間の
こと

野狐(やこ)…狐の妖怪。野生の狐、人間を化かしたりする狐
捨薬…効能がないことを知りながら、患者に気休めに与える薬

調合あるうち彼娘へ問わねと息をえとて医沙もなき
 こと〜小程を死我家へ帰す〜いかに〜ん忽ち小腹
 い〜と〜その位は息絶る妻あるのかと病たのね〜むし
 近隣のおをあつまりさぬぐ小女抱きせども顔色死相を愛し
 寸採も通つた時先には医者を招きし捕をめてとむきめ此
 死骸を棺の中へ納ん〜る物あ〜ぎもも彼娘を死骸と〜り
 養生〜る又舟をくだり〜るの人〜再び驚く〜る〜る〜る
 へ首毫の浮本よりひら〜る如く〜る〜る〜る〜る〜る〜る
 物〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る
 道に再三驚き驚嘆〜る病の火急ある小舌とせられたる〜る〜る
 りぶの〜る病者の死〜る〜と〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る
 みる医者の忽ち死を死生時を同〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る
 速ち〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る
 の〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る
 ○湯橋之組町魚屋何某の妻店小知〜る品物と賣積を死ん
 と〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る
 と〜る物出来て若極き女を〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る
 一物に申より思案と成〜る立昇り消〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る〜る

調合なすうち、彼娘は悶乱まんとらんなして、息たえしかば、医師も本意ほんいなくそこくくに程近き我家へ立帰りしが、いかゞしけん、忽ちに腹いたみて、その俣はに息絶たり、妻なるものおどろきかなしむに、近隣の者、走あつまり、さまざまに介抱かいほうなせども、顔色死相しじょうに變じ、寸脈も通はず、此時先に此医者このいしやを招たりし桶屋おけやにては、むすめの死骸しかいを棺くわんの中に納いれんとしける折せ、ふしぎにも彼娘、茫然まんとらんとして蘇生よみがえりしかば、父母はじめ、あたりの人々、再び驚くはからなるが、盲龜もぐりの浮木うきにあひたる如く喜び事大かたならず、此はしをらたおもかゝりたる医師の方へ告しらすに、医師は只今死したりと云とければ、再三驚腑駭嘆おどろきふたふたし、当病の火急かきなるに舌をまきたるにても、いぶかしきは病者の死したりしと思ひしは、却て蘇生よみがえり、人を活さんとする医生は忽ちに死す、死生時を同じうして、手の裏をかへすより速なり、されば娘が入らんとせし棺は不用ふようになりたればとて、彼医師のもとへ送りやり、彼方の有用うようになしたりしも因縁いんえんとこそ思はれたり、

○湯嶋三組町魚屋何某なにがしの妻、店に出て品物を売、錢を取ひんとてその俣倒はたれ、小半時の間、吐瀉てんげ甚こへ、喉のどのあたりこらふらみたる物出来て苦惱くなん甚敷、終に其時を過すさず、息絶けるに、彼のんどの一物、口中より黒氣くろきと成て立昇り、消きせけるもふしぎの事也。

註

- ・本意なく…思うようにいかない、期待外れだ。
- ・盲龜の浮木…出会うことが非常にむずかしいことのとたとえ。めったにないことのとたとえ。

流行時疫

異國名 コレラ

- 一 薄羅紗又ハウラン木綿或ハリン毛の類を
昼夜とも腹を二重ほど重ね置べ
- 一 桶お湯をとりこしらへての移を五タ斗で其中より
かえり折々両脚の三里の辺まで浸せ
- 一 家の内何れもとも灶ものをなきて濕氣を除くべ
- 一 一切の菓類と多く食ふべ

同 治 法

一 此病と受けしりと知らば熱き茶の中へ其茶の
三分一焼酎を入き砂糖をこくを加えてのむべ
又座敷をくそとめて風をあせぬやうにぬい
其上羅紗のきれ又ハリン毛を焼酎をつけて惣身
を残す方なくこすりてよ

但し手足又ハ腹ならよく意を注ぎ
ところわづか温鐵或ハ温石をあてぬ布につ
浴湯せしやどの心持なるまに摩擦べ
于時安政第五戊午年八月 施印

此一病ハ何れも
移るよのむせとむご
あひたる残又ハくも
うけとてひろくむるま
ける也あまやけふあま
たまるるものいとま

(五) 流行時疫

流行時疫 異国名 ココリ

- 一 薄羅紗、又はうごん木綿、或はもんぱの類に二つ
- 一 晝夜とも腹を二重ほどまき置べし
- 一 桶に湯をいれ、からしの粉を五タ半ごはひやくの其中に
- 一 加えて、折々両脚の三里の辺まで浸すべし
- 一 家の内に何にても炷たきものをなして温気を除へべし
- 一 一切の菓類くだんを多く食ふべからず

同治法

- 一 此病をうけたりと知らば、熱き茶の中へ、其茶の三分一焼酎を入れ、砂糖すこしを加えてのむべし
- 一 又座敷をたてこめて、風にあたらぬやうになり、其上、羅紗のきれ、又はもんぱに焼酎をつけて、惣身を
- 一 残る方なへいすいすしてよし

但し手足又は腹などへよく意いをつけ、ひえぬ

よじろあらば、温鉄或は温石をあたくめ、布ふにつみ

浴あび湯あみせしほどの心持になるまで摩擦こすべし

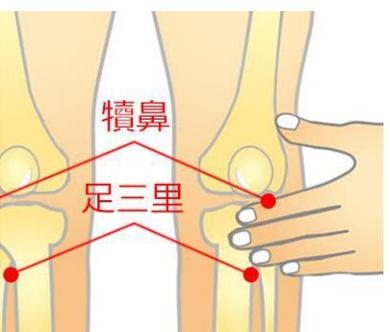
于時安政第五戊午年八月

施 印

一ひらは、何がしのよのめ
 桜木さくらのぼせしほやにつ
 給ひたるを、又いへくにつも
 つこえつ、ひらひらま
 るゆえにや、此手当てあて
 すかるものごと多おほし

註

- ・もんぱ(紋羽)：綿布の一種。地質が粗く、柔らかで、けば立ったもの。足袋裏や肌着に用いられた。
- ・足の三里ほど：膝の皿の下、靱帯の外側にあるくぼみら指幅四本分のツボ。腹痛、下痢、嘔吐など胃腸の不調などに効くとされる。
- ・炷(たき)もの：薫物。種々の香を調合して作った練り香。また、それをたくこと。



(六) 焼場の様子

○余が知己ちぎなる何某なにがし、当八月中旬、こたびの
暴病にわかやまいにて死せし者の為に、小塚原なる茶毘
所に至りし折、人焼葬坊人足の語れる様をおんほう
聞たりしに、去る七月十五日の頃より、焼釜追々
に一ぱいに相成て、焼数多分なりと思ひの
外、月末に至りては、少しく減へりて
釜焼も余り候ひしに、八月に至り、
四日より五六日の間は、死人二三十
宛も残り、十日過より六百人程も
焼残り候へば、此分
にては、中々今日より
来れる分は
九月二日三日
頃ならでは
骨揚こつあげには
相不成、如此かゝるの
次第故、金子
何程出いかほどし給ふ

絵の中の地名

橋場

汐入つつみ

小塚原

みのわ

やきば

新吉原

とも、中々火急に焼候事は出来不申と物語れり。彼人、辺をかへり見るに、庭に積上たる棺の数限りなくしてかぞふるに間あらず、始は大通りを至りしかど、其帰るさには三輪辺に所用あれば、焼場の裏門を抜出んと、諸院の園中を指覗きつゝ、其処を過るに、諸宗はさもなけれど、一向宗の茶毘所は殊に多く、棺をかき入るゝに場所なければ、往還の傍に積揚て両側に充満し、道はゞ一身の往来のみなれば、其臭気甚敷、手拭をもて半面を包み、足早に新町の通に出たりしが、追々茶毘所に持はこぶ棺の数、往来に引続きて、上野広小路まで、その数かぞへしが、わずかに半時の間、道は半道にたらずして、茶毘所に遣す死人とおぼしき棺数のみ百七十三ありしとて、駭嘆の余り余に語れり

(七) 府内人口、御救米

○御府内四里四方、町かず三千八百十八丁、各三十六丁^{おのほの}き里にして百六十八里十三丁なり、此度暴瀉病流行につき、死亡人多く、依之御救被下置

(上段)

○表店 八十五万十三軒

男 三百四十万十四人

吉人五合ぶちとして此米高

老万七十七石七升

女 百七十万二十八人

吉人三合ぶちとして此米高

五千百石八升四合

○裏店 九十二万五千二百二軒

男 百一十一万千二百二十人

吉人五合ぶちとして此米高

五千百五十五石六斗

女 八十五万二千二百八人

吉人三合ぶちとして此米高

二千五百五十三石三斗二升

(中段)

○盲人 九千百十三人

○出家 七万百十人

○尼僧 三千九百九十人

○神主 八千九百八十人

○山伏 六千八百四十八人

× 九万九千四十八人 此米高

四百九十五石二斗四升五合

御府内町方惣人数合て

× 七百万千三百十八人也

○今般御救の儀は表裏に

不限、^{かたがた}貧民へのみ被下置るゝ

(下段)

○但し長袖・地借・三才以下

には不被下、死亡人は勿論也

○貧民 男三十一万六千廿人

此米高 老万五千八百吉石

○同 女子 廿万七千五十六人

此米高 八千百十六石八斗

右は御救米六万俵高御

割付を以被下置るゝなり

貧民男女御救米合て惣

× 二万三千九百七十七石八斗

為四斗相場、此代

× 金六万両 なり

註

ここにある江戸の人口などは正確でない。当時の江戸の人口は町方約五十万人とされている。

(八) 著名人の死亡者

(公文書館本)

○流石の病をりつゝめまう教へて此中よき名は方にてしやうと研
らに記をたき賤の若別をふりてあう一久又余病も何るべき歎

書家 大竹蔭塘 作者 緑亭川柳 画師 著、所其一 役者 松本虎五郎

同 市川米庵 同 柳下亭種員 作者 樂亭西馬 同 尾上橋之助

俳諧 惺庵西馬 画工 歌川國郷 太夫 清元延壽 同 嵐小六

同 福芝齋得蕪 角力 宝川石五郎 同 清元滌太夫 同 嵐岡六

同 過日庵祖郷 同 万力岩藏 同 清元鳴海太夫 三弦 岸沢文定

狂哥 燕栗園 三強 杵屋六左門 同 清元秀太夫 作者 五返舎半九

講談 一竜齋貞山 同 鶴沢才治 同 都与佐太夫 女匠 都千枝

咄家 馬 勇 同 清元市造 太夫 常磐津浪磨 女匠 常磐津孝栄

同 上方戈六 碑名 石工 亀年 同 常磐津和登 同 同 小登名

画工 立齋廣重 画家 英 一笑 同 太夫 竹本梶尾

同 櫻窓三拙 狂哥 六 象園 人形 吉田東九郎 同 豊竹小玉

(早稲田本)

画工 立齋廣重 画家 英 一笑 太鼓 坂田重兵衛 作者 山東京山

(八) 著名人の死し者

○流行の病をもって身まかる人々の中に、其名四方よもに聞えしを聊

こゝに記す、猶貴賤の差別なきは見ゆるし玉へ、又余病もあるべき歟

(公文書館本)

書家	大竹蔣塘	作者	緑亭川柳	画師	菁々所其一	役者	松本虎五郎
同	市川米庵	同	柳下亭種員	作者	楽亭西馬	同	尾上橋之助
俳諧	惺庵西馬	画工	歌川国郷	太夫	清元延壽	同	嵐 小六
同	福芝齋得蕉	同	角力 宝川石五郎	同	清元染太夫	同	嵐 岡六
同	過日庵祖郷	同	万力岩蔵	同	清元鳴海太夫	三弦	岸沢文字八
狂哥	燕 栗園	同	三弦杵屋六左衛門	同	清元秀太夫	作者	五返舎半九
講談	一竜齋貞山	同	鶴沢才治	同	都与佐太夫	女匠	都 千枝
嘶家	馬 勇	同	清元市造	太夫	常磐津湊磨	女匠	常磐津文字榮
同	上方才六	同	碑名 石工亀年	同	常磐津和登	同	同小登名
画工	立齋広重	画家	英 一笑	同		太夫	竹本梶尾
同	櫻窓三拙	狂哥	六朶園	人形	吉田東九郎	同	豊竹小玉

(早稲田本)

画工	立齋広重	画家	英 一笑	太鼓	坂田重兵衛	作者	山東京山
----	------	----	------	----	-------	----	------

註

・立齋広重は有名な浮世絵師歌川(安藤)広重のこと。この年九月六日没。

・早稲田本には山東京山が死亡者として挙げられているが、国立公文書館本では太夫 竹本梶尾となっている。

兄の京伝と共に有名な戯作者である山東京山は、コレラ流行期である九月二十四日に没しているが、コレラではないとわかって後に編集しなおしたのか、詳細はわからない。

○當時のされももずむらひをうけあうひ

借金で借金女一筋〜〜めだぶや進達の縁〜〜ううま務

紀のまろ

世びの医者の丸あぶ死出の心よふ下れ旅法師のまろい

作者ふ知

世の〜我吐く賤布のま〜三日精〜と寝はけもは

それせん

流りぬれぬらう〜〜井ま〜心ま〜と悪もはるこ

思 晴

埋もむ焼傷の困る苦の中はほとと魚喰くあうん

他ろ〜ら

「あふらう〜二日で佛よ〜」

知と〜借の返り〜〜の〜〜を〜〜目〜〜する

志る 様

(九) ざれうた

○当時のざれ哥も聞およびしを三つ四つこそす

借金を 娑婆へ残して おきざりや 冥土の旅へ ころり欠落

紀のをろか

此たびは 医者も取あへず 死出の山 よみじの旅路 神のまじなひ

作者不知

ぜいたくを 吐て財布の はらぐだし 三日（いぶ）転りと 寝つゞけもよし

はれます

流行に かくれさきたつ うき中に アしいきますと 恋もする也

思 晴

埋はこむ 焼場は困る 苦の中に 何とて魚 喰へなかるらん

作者しらす

お寺はよろこべ 二日（ふた）で佛になったはヤイ

知己（ちかひ）を 往つ返りつ とぶらいの ともにゆかぬぞ 目出度かりける

しな猿

(十) 八月の死亡者数

○ 八月初日より晦日まで日ごと書しお終ひ死人の数

初日百廿八 二日百廿七人 三日百廿五人 四日百廿七人 五日二百廿七人
 六日二百廿八 七日二百廿八人 八日二百廿八 九日二百廿八 十日二百廿八
 十一日二百廿八 十二日二百廿八 十三日二百廿八 十四日二百廿八 十五日二百廿八
 十六日二百廿八 十七日二百廿八 十八日二百廿八 十九日二百廿八 二十日二百廿八
 廿一日二百廿八 廿二日二百廿八 廿三日二百廿八 廿四日二百廿八 廿五日二百廿八
 廿六日二百廿八 廿七日二百廿八 廿八日二百廿八 廿九日二百廿八 三十日二百廿八
 八月廿九日百廿八
 八月三十日百廿八

はか全書とはあり人別りの数一万余七千七百人九月にお終ひて
 九月にお終ひてはあり人別りの数一万余七千七百人にお終ひて
 お止 色別にお終ひて

或院生の住持一田く八月下月にお送札敷九一ヶ年分もまじりて
 平日の飯焚門は老翁又口おの事業人と存し大概寺作は成り
 と由りてとらぬるうううはたけの石工定日存も皆くまらるる万ふ合うね
 井戸堀蔵人とれらるるあてぬく安堵とすううとあん

(十) 八月の死亡者数

○ 八月朔日より晦日まで、日々書上に相成候死人の員数

朔日	百十二人	二日	百七人	三日	百五十五人	四日	百七十人
五日	二百七十七人	六日	三百五十人	七日	四百六人	八日	四百十五人
九日	五百六十五人	十日	五百五十九人	十一日	五百七人	十二日	五百七十九人
十三日	六百二十六人	十四日	五百八十八人	十五日	五百八人	十六日	五百二十二
十七日	六百八十一人	十八日	五百六十一人	十九日	五百九十七人	二十日	四百六十九人
廿一日	三百九十二人	廿二日	三百六十三人	廿三日	三百七十人	廿四日	三百七十九人
廿五日	四百十四人	廿六日	三百九十七人	廿七日	四百十六人	廿八日	四百三十五人
廿九日	四百四十七人	晦日	三百二十三				

× 一万三千四百九十人

程有之候由

此分全書上、此外に人別なしの者数一万八千七百三十七人、九月に相成候て
重複 九月に至りては大きに減じ、三四日頃は五六十人に相成、夫よりは、はたと
あいごみ 相止、通例に相成申候

或院主の談話はなしに曰く、八月一ヶ月に送礼数凡一ヶ年分も来りし故、

平日は飯焚門番親爺、又門前の無業人を雇あそびとひ、大概世話敷成たり

とも、事欠ことはなかりしが、此度は石工・定日雇も皆々懸りて、間に合かね、
いとや 井戸堀職人を頼みたるにて、漸々安堵をなしたりとなん。

(十一) 街中のいぼね話

1 千住

かもちしほへ

○千住掃部宿に

奈良屋平次郎

といへる小間物

商人ありける、その

妻、当八月廿日頃

浅草山谷に所用

ありて赴ける

途中、今戸の方よりかた

頭を剃こぼち、瘦枯やせかれ

色青ざめたる若き男の

素裸にて童等わらわちに

追はれて来るに

行合たり、余りに人の立つどひて

喧かまひすしければ、何事やらん、狐つきの

類にやと、立よどみて、人に問ふに、

当病の為に死して焼場にやられし

者の、只今蘇生いまかえりて焼場を逃出

此処こゝかしこ彼処をうろつくなりし

語りしかば、例の虚言うつらごとにやと、心

にも留とどまらず、その所を立たたり、後のちに

聞きば、是全くの事ことにきけ

蘇生の若人は市ヶ谷

辺の商家の

倅こなりけるよしぞ

2 湯島

○湯島の辺に貧くくらす

夫婦の者ありけり、夫は

久しく病に臥て、此頃

少しく快気かたに

赴きたれど、未だ立居

自由ならず、その妻なる

ものは、今の世に稀なる

貞節にして、夫が長々の

病に、朝夕の烟り立かぬるを

その身かひづく敷働き、小商

などしてその日を過し、夕ゆづに家に

帰りて、夫の介抱おろそかならず、

しかるに、その妻こたびの暴病に

犯され、一日病ぢみてその夜

終に空敷成けるが、

懐妊して九ヶ月に

成れり、知己者ちかしき

打寄て談合し、

夫は病て

葬式の

手当も

なかりしかば、

手段して金

子を調べ、

菩提所に送り、

焼場にやりて骨

拾ふ日を約し、近隣の

者は立帰りぬ、しかるにその

夜、かの妻なる者、焼場の

葬坊が枕辺に立頭はれ、

夫が長々の病に臥し

不如意の折がら、又我身の為に

一倍の物入ありては、後の術計尽

果なんと思へば、是のみ迷ひの

種なりと、さめぐくと打泣ける。

斯する事三夜なれば、葬坊も奇異なる

事に思ひ

その夫が

杖に

すがりて

骨揚こつあげに

来れる日きた

子細を

尋問、誠に

夢想と

割符を

合せあはせしむ

なれば

焼料やきりょうを戻せしむ

別に

香奠の

料を

あたへ、回向して

遣はしけるこそ

その後のちは

別に

ふしぎも

なかりし

とぞ

八月十八日の夕ありと名敷考屋町大虎 乃を看ありと申若の妻煖美のをげう渡世
 の若依ふ是病神と申下若座の若女公托瓶の付る者之と勢れ是同いける小病入の中
 あは未だ瓶の若なき系終りは有るは病地海指花枝入使の若多りは有れ我等ともはらてれ
 了る也二に申小田宗也大の命と考一は元も多使れぬも秋と報のん受り大元小食の
 施しはば入る事じうやて版とを食けりも方種とてひそ小我ハ瓶と申若あり今友
 井瓶小付と云る申ハ瓶瓶と云ふ事と書同小瓶と申ゆすうと云ふ押入推るは人々
 少う制一表のやと破破の地を食ひ終て返るに小高南の指花の洋皮のあふてれ
 中とり小瓶と云く一は打倒しは解とてつとて全快のう一返れと申その返れやて
 病と申ゆ一敷考屋町家已破流舟といふ若の御あり

尾林も長年
 船つじ
 第一野あり
 百夜



又文のつりいざあふ
 西の小田宗也
 加ふる指花の穂は
 是れ名号て考屋町
 りか
 山もたやふあふり
 ね瓶

凡のの鏡ひから
 したもあはれも庵のい
 名やづも又一箇の大物
 早もつる若小
 出敷辰
 去威ふらふま由

なびくありだ
 香籠

3 野狐

八月十八日の事なりとかや、数寄屋町大虎おおとら家主書役しやくやくの者、俄いに異病躰いびんたいにて、同じ長屋ながやの者奇合きあ、野狐のぎよの付たるにやと大勢取巻おほせとりまき、問ひけるに、病人びやうにんの申まをには某それがし左様の者に無之、京都より御用向有、鉄炮洲稻荷社てつぱうすなづかへ使の者なり、此御用、我等ども四つにて承り候処、二つは道中小田原にて犬の為に命を落し候へ共急なる使故、帰りに敵あだを報はんと思へり。右左みぎひだりに食に餓うたれば此処へは来りしよし、やがて飯をぞ食しける、其間種々しゆんしゆんこと問ひ懸しに、我八つ狐と申者なり、今度野狐やこに付ねざるには八狐親分三郎左衛門と書、門戸に張べしと咄し終り、すつと立ち、押へ居たる四五人をふり倒し、表の戸を蹴破り馳出す故、兪々みなみな跡を追ふたりしに、水谷町角の稻荷の拝殿の前にて頼申といふぞとみへしが、打倒れ正躰無なまをつれかへりて、全快のよし、坂部と申名主の支配下にて届いたを出し候よし、数寄屋町家主磯次郎といふ者の咄しなり

厄神も長居は

ならじあし原や

わかたに立ち

帚星には

百舌

天文の事はいざしらす

西方さいほうに星出せいしゅつて、画えに

かける稲の穂のいづく

是を名呼なまひて豊年星と

いふ

出来秋や 空にあらはる 豊年星

松瓶

凡ものは 祝ひがら

よきもあしきも へのいづくに

見やぶるも又一箇いっかんの大語だいごか

晝ひるらねる 夜にすいと

出る放屁星

武威ぶいにいくれきも

なびくころころ

金瓶



〇或人妖僕あるひやくやくの
 おんきつづか
 満士木津氏まんしきつづかの
 人々ひとびとを助たすけ
 けりし事ことを
 記しるす
 事こと

4 妖怪

○或大諸侯の

藩士木津氏なる

人、元來剛勇の

氣象にして、武

術も又類なき

達人なるが、今度或

夜の事なりとかや

宿直より退出して

宿所に至るが、此人未だ

妻もなければ勝手知りたる我が

家の戸を引明け、内に入て寝

所に赴かんとするをり、

屏風の中より

最凄じき

異形の

妖怪

忽然と

して顕れ

出、木津氏に

飛かゝるに、ものくしく

ござんなれと身をばしつて、腰刀を

抜より疾く妖怪の真面目

がけて切付るに

此形勢に入きまきしてや、

かの妖

怪は身を

おどらし、外の方

さして逃んとするを

木津氏透さず追とどめ

辛くして是を生捕、

燭をてらしてよくく

見るに、是年経狸にて

当時奇病の流行せる、その

虚に付込、諸人をたぶらかし

なやむるものとぞ聞えし

註

・「ござんなれ……であるようだな。

くようだな。」「ござなれ」とも。

○中橋衣会所小中間大英と

いふ町にありらむの

暴落病小旅の医師の

足控らる病人とも自己

茶利医業とそとて多く

本後させさりしが

或れを降ふ後多の可

ありて変ふ振うとありく

酸町にて家小病り悪まらん

と一ける時氣のゆき歎お

大英が傍小病りしと

ア嵐の寄小病退少

よと妻小控揮

せらうと妻の月あり

更ふふまをを亮角さる門

ソレ嵐めら擔へ入らういをせん

苦く叫ぶ小入らうとあふ不をまじと

ぬまはあも立膝さそのあ

布と見え縁まとするうち近所の人も走

あつまる小大英い最るけふアレ又嫁へと

さう背へむぐらうと慍亂するうちとさびい

後へ入らうとを嫁ふその傍ふ息絶けその大急あるとするもわくはせる

の影ひの影はあつるう料か違あをその一とつと後小揚て万、年の後

かゝるりあゝん時の知の小書成りそととせねう

前の大英の顔ふ似て死せる者もね多ありや療治うと尋ふ彼の

身精なるあまう如とまうと捕へ又汝先を後まといを物付と責うかゆく

の退せう退るべの影のやいと又と適まが息化慍の念もありま

そのと実者さ血とわいけ仰あり或はやむさう悪まら考うとね

救トらうなと実ふるあ嵐のゆとま



5 「しらで死んだ医者

○中橋岩倉町に本間大英と

いへる町医あり、こたびの

暴瀉病はせりやまじに余の医師の

見捨たる病人をも、自己おのれ

薬用、医案を尽して、多く

本復させたりしが、

或夜近隣に祝義の事

ありて、夫に招かれ、少しく

酩酊して家に帰り、寝まらん

としける時、兎の如き獣物けもの

大英が傍かたわらに來りしかば

「アし兎の寄に疾退しくけ

女めと妻に指揮さしず

せしかど、妻の目には

更にふれず、兎角する内

しし兎めが膝へ入たり、いかんせん

苦しみ叫ぶに、入たりと思ふ所はれ上り

ぬれば、妻も立騒さわぎ、その所を

布をもて結ゆなどするうち、近所の人ども走は

あつまるに、大英は最さいくもるしげに、「アし又腕かひなへ上り

たり、背うへへむへりたり」「と騒さわすうち、こたびは

腹へ入たりとて、終にその仮に息絶ける、その火急なること寸間もあらず、是等

の類ひの奇異ある事、数かずふる違ちがあらず、その一二二つを後に揚て、万々年の後

かゝる事あらん時の心得に書頭かひはすをよみねかし。

前の大英も話しに似て、死せざる者も数多あり、其療治かたを尋るに、彼の

身みなるみくみれし処をしかと捕へ、又跡先を結ゆなどして、狐付を責せるが如く

いび退ぞくか、退からずは斯の如しと、刃やをなわはば、忽たちちなみの怒こるもあり、また

其処を突貫つき、血を出して助るあり、或は其処より黒氣こくたち、光りを放ち

散じたりなど、実に不思議の事どもなり。

註

・寝まらん：寝よう 「寝まる」＋助動詞「ん」

○時節の前表

こゝは高田の馬場辺に、去る大諸侯の屋敷守・森山丈助といふ人あり、此人武事には達したれども、世事に疎きと思はれたり、頃しも五月の事なるが或夕ゆふ、気分悪敷あし、独身の心安ひとりのこころやすさは夜食も喰いず寝いたるが、夜半の頃は枕辺まくらべに誰やら座すると夢を見て、覚おぼればゆめにあらずして、図ずに頭かぶはせるごとくなれ、不審ふしんに思おもひ尋たずねれば、我われは厄神やくしんの王みなるが、四五日宿やりを飯かせよといふ、這こは迷惑めいわくの所望しよぼうかな、吾われ独住ひとりの事ことなれば、一日病ひても難やまじなり、疾い立て出でよと叱なれば、彼の老人らじんは微笑ほほえつ、いやとよ貴こ邊へんは悩なざじ、宿やだに飯かして給たまはらば、外ほかに厄介やくけいなるまじといふゆへさらば彼か処じの一ひと間まに入いたりと見みしは幻まぼろし夢ゆめ現あらわ、老人らじんやがて禮らいをなし、渠かれ等はら僉みな々みな我われ眷屬けんじやく、宿やりの礼らいには斯ごとくと、図ずのごとく端書はながきを教おしへ、是こゝを門戸かどに張た置おば、我われが徒た一人ひとりも這こ入いまじ、若ごとや入いたる家いへあらば此こゝ札しやくをもて身内みうちを撫な、其その病人びやうじんの床とこの下したへ敷して置おなば命いのちを欠かかず、又また藥方やくかたを伝授でんじゆなして、必かならず此こゝ年とし秋あきに至いたり、多おほくの人ひとを助たすけよと、伝つたへ終はりて、一ひと間まに入いしが、翌日そご其その処じの一ひと間まに物ものなく、自己おのれも昨夕ゆふの悩なみに似にず、最い快くわいく起おきたれば、例れいのごとくに庭にわへ出でず。中間ちゆうかん共どもは是こゝを見て、昨日けふの熱ねつの様ようにては斯ごとくに出勤しゆきんは在ありまじ、いと思おもひしなど語るに付つて、厄神やくしんが宿やりを飯かに來きりしと話わせば、下部げぶも半真はんしん半疑はんぎ、自己おのれも一ひとつの疑ぎひあり、且かつ安房あほうらしと恥はらいて、其その後のちは人ひとに話わしもせず、六月ろくがつも過すぎ、七月初旬しちがつしよじゆん、築き地に甥おにいの奉公ほうこうせる屋敷いへへ用もちあり、赴おもきたるが、彼かの屋敷いへなる足輕頭あしかりかぶ、跡追あと來きり此こゝ六月ろくがつ、甥おにい君きみに話わしの有ありと聞き、厄神除やくしんじゆの札しやく二ふた枚まい、且かつ伝方でんかたの丸藥まるぐすりを製つくして与たまへ給たまはらずや、今いま我われ部屋へやに熱病ねつびやうにて最い悩なめる者もの兩人ふたりありと、強こゝて乞これて黙止もくしがたく、甥おにいが宅たくにて是こゝを拵しらへ与たまへたりしが、其その翌日そごより、病人びやうじん食氣じきを催も

註

・禮らい…敬けいうこと、敬意けいぎを表あらわすこと

して速に全快なせしとなり。是彼の甥が六月中、土用見舞に來りし時、夢物語を成したるを伝へ聞たるものとなん。夫よりは彼の屋敷にて大きに札を珍重し、我もくと乞受る中に一人酒狂者あり。大きに是を悪口せしが、その夜に病付死したるよし。其時不思議の験ありて、札を乞もの多きよし、又奇とするは老人の言葉、此秋流行といひしより、札の名当の邪といふ文字にて、例の熱病ならぬを察しぬ。

安政五戊午年五月廿五日の

夜の約定を忘た乎

邪神主

定保



指形

べに也

(十三) 守り札

白澤上圖

毎夜この巻を

枕にそへて臥す

ときは、凶ゆめをみず

もろくの邪氣を

けんぬなり

神たちが せ話を

やく病このすへは

もつなかとみの

はらひきよめし

于時 安政五

戊午 季種九月

天壽堂 蔵梓



註

・白沢（はくたく） 中国に伝わる瑞獣（神獣・聖獣）の一種。人間の言葉を解し、万物の知識に精通するとされる。その姿を描いた凶画は魔除け（厄除け）として用いられる。
・中臣の祓い・六、十二月の晦日に朝廷で行う大祓、およびその祓詞（はらえことば）の別称。中臣氏が司っていたので、こう呼ばれる。

江戸のこれら大流行

安政戊午是痢流行記 翻刻

翻刻
一杉
勝